

「「ごちゃまぜ」のまちづくり  
～高齢者も障がいのある方も誰もが居場所と役割を持つコミュニティ～」要旨

---

(開催要領)

- 1.開催日時: 令和2年 10 月 25 日(日)13:00～15:30
- 2.場 所: 輪島KABULETうめのや(石川県輪島市)
- 3.登壇者: 内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局 次長 武井佐代里  
社会福祉法人佛子園理事長 雄谷良成  
女優・歌手 中尾ミエ  
輪島市副市長 坂口 茂

(プログラム)

- 1.開会挨拶・施策説明  
「生涯活躍のまち」  
内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局次長 武井佐代里
- 2.講演  
「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会～」  
社会福祉法人佛子園 理事長 雄谷良成
- 3.クロストーク  
「顔が見えるまちで暮らしたい  
～空き家の利活用で再生した「輪島KABULET」の魅力～」  
雄谷良成/中尾ミエ/坂口茂
- 4.閉会

\* 敬称略・順不同

---

1.開会挨拶及び施策説明「今後の地方創生の方向性」について

○「生涯活躍のまち」政策説明

「生涯活躍のまち」は、年齢や障がいの有無等を問わず、多様な人々が居場所と役割をもって、生涯を通じてやりがいを持って、アクティブに活躍できるコミュニティづくりを目指すものです。

日本の人口は、2008年がピークで2019年は9年連続の減少で約1億2600万人。高齢化率は2019年に28.4%と過去最高水準となっています。出生に係る動向は、2019年には86.5万人と過去最少にまで減少しています。東京圏へ入ってくる人と出ていくとの差は、増加傾向にあり、2019年は14.6万人の転入超過です。

少子高齢化により人口減少が急速に進行している中、若い方を中心として地方から東京圏に人口が流出していることにより、地方における15～64歳の生産年齢人口が減少しています。

昨年12月に閣議決定した「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」における地方創生の施策の基本的方向は、地方の人口減少を和らげるため、「結婚・出産・子育ての希望をかなえる」、「地方の魅力を育み、ひとが集う」といったことなどの実現を通じて、「将来にわたって活力ある地域社会の実現」により、「東京圏への一極集中の是

正」を目指すものです。横断的な目標として、「新たな全世代・全員活躍型生涯活躍のまち」を位置づけ、地方創生に取り組んでいきます。

誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりとしての「生涯活躍のまち」の魅力は、人々が集まれる施設の整備だけではなく、地域のコミュニティに関わる者の多様性が重要であると考えます。

誰もが居場所と役割を持つコミュニティの実現に、国として今後とも取り組んでまいりたいと思います。

## 2.講演「ごちゃまぜ～看取り合う共生社会～」

雄谷：

いろんな人が関わりながら過ごす“ごちゃまぜ”は私たちの拠点のあり方で、その一つが輪島カブーレというプロジェクトです。

まち・ひと・しごと創生本部が「生涯活躍のまち」というものを推進して6年になります。これは、子どもも若者もお年寄りも、障がいのある人もない人も、認知症の人もそうでない人も、それから日本人もそうでない人も、みんなが一緒になって暮らすということを考えていこうという地方行政の取り組みです。この輪島カブーレはその最初の7つのモデルのひとつです。

輪島市は、ピーク時には4万8000人いた人口が今では2万7000人程度となりました。輪島塗の売り上げがピーク時の140億円ほどから今や36億円台になり、輪島市は100億円もの基幹産業を失い、輪島市からは労働人口の流出が加速する現象が起こりました。そういった中で次々と空き家が増えていきました。いかに再利用しながら町の活性化をしていくかが問題になったのです。

私たちは、それを少しずつ丁寧に改修していきました。会員制のウエルネスクラス、子育て中のお母さんがお子さんと一緒にクッキングを楽しめるママカフェ、ラーメン屋。このラーメン屋では障がいのある人たちも働いています。ウエルネスにやってくる人、クリニックに来る人、ご自身で食事が作れず配食サービスを利用する人、温泉を利用する人など、そんな人たちがどんどん集まってくる場所ができたのです。

今では輪島を訪れた方は、人々に触れてそこで会話をするのが非常に楽しく、本当の日本を見たようだと言います。それが口コミでどんどん広がっていき、いろんな人たちが訪れるようになってきました。

町の人とそこを訪れる人の交流が活性化されることで、町が非常に居心地が良く感じます。そのような居心地の良さを皆で分け合う時代になってきたと思っています。

“ごちゃまぜ”というのはいろんな人が関わることによっていろんな人の居場所ができてきます。

日本の少子高齢、人口急減というのは確かに大きな問題ではあります。

私たちが今迎えている状況というものが、一つの経験値となり、今度は同じ悩みを持つ他の国々、国際社会に伝えていくことが大切です。

## 3.クロストーク

### ①「輪島KABULET」～3人の出会いのきっかけ～

中尾：

日本国内いろんなところに行きましたが、自分が行くとしたらどこに行きたいか考えていました。そのような時に雄谷さんにお会いしました。輪島に行き、「ここだ」と思いました。私が思い描いていた場所で、一目惚れでした。

坂口：

ちょうど6年前に地方創生ということが言われ始めました。5年前に地方自治体すべての中で地方創生の総合戦略を作り出しました。その時に雄谷さん達の活動を知り、お願いして輪島でもやってもらおうと思いました。雄谷さんには、空き地・空き家を活用して、輪島の町家の様式を上手に使いながら、この輪島カブーレを展開していただきました。

## ② 顔が見えるまちの魅力

中尾：

今日のサブタイトルでもあるように、街を歩いていると、建物の中の明かりが見えます。温泉にみんな集まってきて、そこがみんなのコミュニケーションの場所となります。私が思い描いていたものが全部そこにありました。広すぎず本当にいい塩梅のスペースでみんなが目が行き届くことが、何よりいいと思いました。

坂口

輪島の人達は、小さい市ですが、大勢の観光客に来ていただいており、市外の人たちに接することにも慣れていると思います。一度仲良くなると、とにかく野菜でも魚でも、何でも家の方に届けたり、古き良き生活習慣がこの時代にまだ残っています。

## ③ “ごちゃませ”実現に向けて

雄谷：

“ごちゃませ”の場所は必ずトラブルが起こります。例えば健常者と障がい者との問題です。すると、そういうことが起こらないようにきちんと分けた方がいいのではないかという意見が出てきました。その時に坂口さんや商工会議所の人たちは、「そういったものを分けてしまえばなくなるかもしれませんが、問題は解決できていない」と問題に向き合ってくれています。

坂口：

役所というのはどうしても問題が起こらないようにするのが仕事です。それだけではやはり解決しません。最初から蓋をしてしまうことは本当にいいのかと言うとやっぱり違うなと思います。

福祉を例にとっても健康の方と老人の方とまた違っていたりします。“ごちゃませ”ってある意味、“ごちゃませ”だからこそのいろんなことが起こるのですが、それがまた新しいやり方、生き方につながっていきます。

(以上)